

## 4. 研究開発の進捗状況—目標の進捗状況分析

### 4.1 生徒の変容—SGH 生徒アンケート分析

アンケート回答数 n=356 (前年 n=342)

4年 n=121、5年 n=125、6年 n=110

※n は回収時欠席者等を除く件数である。

#### 特徴的傾向

- ・ 外国語資格取得者・保持者数は昨年並みだが、高レベルを保持している。  
英検 1 級取得 (保持) 者 93 名/回答総数 356 件中  
英検準 1 級取得 (保持) 者 130 名/回答総数 356 件中
- ・ 海外大学 (大学院) への進学希望者も昨年並み。(単純数値比較 : 45 件→72 件→73 件 前年と同様)
- ・ SGH 指定後に高校生となった生徒の到達レベルとしては一定のゴールにたどり着いたものと思われる。今後は意識や能力を生かす仕掛けを設けることが必要となる。

今年度も昨年度に引き続き 3 学期に後期課程の生徒を対象としたアンケートを実施した。

内容は昨年度のものの一部改訂するとともに、4 年生・5 年生については学校全体で使用しているクラウドウェア Office365 (マイクロソフト) のアプリケーション「Forms」を使って web 上で回答を回収した。回答回収の都合上、今年度の表については原則として 4 年生～6 年生の数値を合計したものを、前年度までの 3 か年分と比較して示すこととする。

#### 【1】取得した英語検定の級

過去 3 年分 (4 年～6 年)	3 級以下	準 2 級	2 級	準 1 級	1 級
平成 27 年度	9	59	100	62	55
平成 28 年度	13	58	85	64	60
平成 29 年度	99	125	169	120	102

平成 30 年度	3 級以下	準 2 級	2 級	準 1 級	1 級
6 年 (今年度)	4	2	7	8	10
6 年 (これまで)	36	48	36	41	26
4 年・5 年 (今年度)	4	9	35	26	16
4 年・5 年 (これまで)	74	86	112	57	41
<b>総数</b>	<b>118</b>	<b>145</b>	<b>190</b>	<b>132</b>	<b>93</b>

#### <分析>

・ 1 級取得保持者が微減したのは、4 年・5 年で今年度 1 級を取得した生徒がやや減少したことによる。全体としてはつまり後期課程の 4 人に 1 人は英検 1 級を取得済みという状況である。ただし、準 1 級保持者は昨年とよりも増えている。昨年度に比較して回答者数が増加したことによって増えている部分もあるが、今年度取得した生徒が 4 年・5 年だけでも 26 名おり、中には中学生になってから英語の学習を始めた生徒も複数見られる。

【2】英検以外での外国語資格受験・取得状況（30年度分）

	TOEFL	TOEIC	GTEC	国連英検	IELTS	TEAP	仏検
平成 27 年度	48	40		1	4	0	6
平成 28 年度	44	32		11	3	0	13
平成 29 年度	66	48		8	9	2	28
平成 30 年度	59	31	49	10	14		11
	尼検	西検	伊検	中検/HSK	TOPIK (韓国語能力試験)	JLPT (日本語能力試験)	独検/DAF
平成 27 年度	1	2	1	2/3	1	0	3/2
平成 28 年度	1	0	0	0/4	0	1	8/0
平成 29 年度	0	1	1	5 (合算)	2	1	3/0
平成 30 年度	0	6	0	3	1	0	2
	露検	伊検	DELTA	ELF B/Junior			
平成 27 年度	1	0	0	1			
平成 28 年度	0	0	0	1			
平成 29 年度	0	1	1	0			
平成 30 年度	0	0	0	0			

以下に英語の資格取得者の内、最も高いスコアと級を示す。

- ・ TOEFL IBT 最高点=116
- ・ TOEIC 最高点=990 (=満点)
- ・ 国連英検 取得級の内最も高いもの=特 A 級
- ・ IELTS 最高点=8.0

<分析>

・ IELTS の受験者の微増以外は、例年から微減している。データは今年度の取得分なので、昨年度までに自分の目標値に届いている生徒もいることがその原因として考えられるが、一方で海外への渡航経験も旅行目的は微増しているものの、回答数に占める割合として「留学」が各種の研修などは減少傾向にあり、特に 4 年生・5 年生がやや内向き志向に傾いている可能性がある。

【3】今年度における海外への渡航経験

	旅行	留学・研修 (1か月以下)	留学・研修 (3か月以下)	留学・研修 (1年以下)	ボランティア	調査・研究	国際大会参加	その他 (進路関係)	ワーク キャンプ
平成 27 年度	97	31	0	26 (+留学 中 13)	7	9	1		126
平成 28 年度	91	64 (+留学中 16)			8	8	0		130
平成 29 年度	97	69 (+留学中 8)			3	10	10	17	134
平成 30 年度	105	63 (+留学中 11 名)			6	8	6	7	127

<分析>

・今年度における海外渡航経験は例年通りである。留学・研修の数はあまり変わらず継続的に 70 人強の留学・研修による渡航者がいる。ただ、国際大会への参加や大学進学を念頭においた大学見学などに出かけた生徒は減少傾向にある。

【4】今年度の活動を経て海外に行きたいと思うようになったか（目的別）（複数回答可）

	旅行	短期留学	1年以上の留学	海外進学（大学院を含む）	海外で働く	いいえ
平成 27 年度	186	88	85	28	77	45
平成 28 年度	171	107	82	45	77	82
平成 29 年度	215	143	95	72	105	40
平成 30 年度	206	143	99	73	80	43

<分析>

- ・全体的な海外に対する意識の大きな変化はないと考えられる。
- ・「いいえ」の回答の主な理由としては以下が挙げられている。  
日本で活動したい。もともと海外志向を持っていた。語学力が足りない。経済的な事情。  
海外は飽きてしまった。海外の生活が長かったから。

これらの回答を踏まえると、数字以上に海外志向を持っている生徒がいることがわかる。一方でさまざまな海外経験が逆に海外志向を減退させる一因になっていることもあるようである。ここから、海外へ行く意義を感じさせ、より深い課題意識を持たせられるような海外経験を積ませる必要性もあると考えられる。

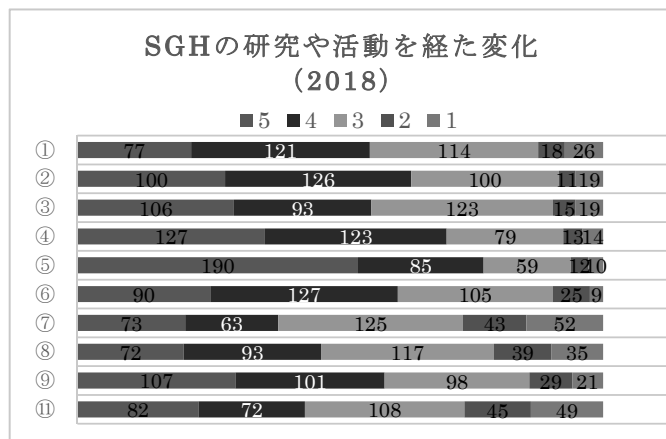
【5】SGHの研究や活動を行って変化したこと

- ①国内のニュースに興味を持つようになった。
- ②国際的なニュースに興味を持つようになった。
- ③日本のことをもっと知りたくなった。
- ④世界のことをもっと知りたくなった。
- ⑤外国語の勉強を頑張ろうと思った。
- ⑥教科の学習と世界の出来事をつなげて考えるようになった。
- ⑦将来の夢が具体的になった。
- ⑧学校外での活動が増えた。
- ⑨学んだことや感じたことを友達と議論した。
- ⑩学んだことや感じたことを新聞などに投稿した。（=30、29年度は問わず）
- ⑪SGHがきっかけとなって何か新しいことを始めた。

※各項目を5段階で評価：5=強く思う 3=普通 1=全く思わない

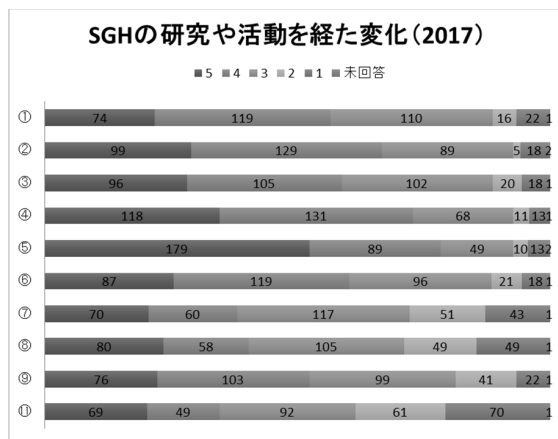
<平成 30 年度> (n=356)

	5	4	3	2	1
①	77	121	114	18	26
②	100	126	100	11	19
③	106	93	123	15	19
④	127	123	79	13	14
⑤	190	85	59	12	10
⑥	90	127	105	25	9
⑦	73	63	125	43	52
⑧	72	93	117	39	35
⑨	107	101	98	29	21
⑩	82	72	108	45	49



<平成 29 年度> (n=342)

	5	4	3	2	1	未回答
①	74	119	110	16	22	1
②	99	129	89	5	18	2
③	96	105	102	20	18	1
④	118	131	68	11	13	1
⑤	179	89	49	10	13	2
⑥	87	119	96	21	18	1
⑦	70	60	117	51	43	1
⑧	80	58	105	49	49	1
⑨	76	103	99	41	22	1
⑩	69	49	92	61	70	1



<平成 27 年度> (n=313)

	5	4	3	2	1	未回答
①	87	105	98	7	15	1
②	107	104	79	5	17	1
③	83	104	98	10	17	1
④	113	112	67	3	17	1
⑤	138	96	58	6	14	1
⑥	59	97	118	20	18	1
⑦	78	61	105	35	33	1
⑧	53	68	108	43	39	2
⑨	55	86	102	41	27	2
⑩	34	32	86	43	117	1
⑪	41	30	91	50	98	3

<平成 28 年度> (n=308)

	5	4	3	2	1	未回答
①	87	98	101	7	13	2
②	109	98	78	8	13	2
③	90	94	97	15	10	2
④	109	91	88	8	10	2
⑤	133	94	60	11	9	1
⑥	70	77	122	18	19	2
⑦	71	68	101	38	29	1
⑧	72	52	102	38	43	1
⑨	67	78	100	33	28	2
⑩	31	24	82	45	124	2
⑪	40	37	85	39	106	1

<分析>

- ・昨年度同様⑤・⑧の項目の「5強くそう思う」の回答数の多さは、世界へ目を向けるきっかけ、また世界で活動するためになにをすべきかという点に関心が強まっていることを示している。
- ・⑨の項目の「5強くそう思う」の回答数の増加はより多くの生徒が「社会的話題への関心」が強まったことがあると考えられる。

【6】SGHの3つの大テーマのうち今後世界の諸問題と向き合うために強く意識すべきものはどれだと思うか。(複数回答可)

	1 リスク	2 葛藤と軋轢	3 教育
28年度 n=308	74	105	122
29年度 n=346	112	162	152
30年度 n=357	141	203	167

<分析>

- ・全体としてすべての項目において数が増えているのは、回答数の増加によるものであろう。
- ・一つの分野ではなくさまざまな分野における関心が高まっていることがわかる。
- ・研究を進めることで、世界に存在する課題は多様なテーマが絡み合っているということに対する理解ができているということが考えられる。

【7】課題研究を進めるにあたってどのような教科の学習と最も関連があると思ったか。（複数回答可）

	1 すべて	2 国語	3 数学	4 理科	5 社会	6 英語	7 保健体育	8 芸術	9 技術家庭	10 情報	11 国際教養
28年度 n=308	43	27	34	48	120	48	27	13	23	21	46
29年度 n=346	110	74	60	58	153	109	17	35	25	68	88
30年度 n=357	135	69	49	61	148	86	12	29	19	63	82

＜分析＞

・「すべて」の回答数が増加している。研究に際し、多様な力が求められることに対する理解と気づきが起きていることが推測される。

・「英語」の回答が減少している。これまでは「SGH」、「世界」というと英語力が必要という印象を持っていたのではないかと考えられるが、課題に対しての研究を進めることで、単に英語力だけではなく、さまざまな力が必要であるということを実感していると考えられる。

【8】課題研究を進める上でどのような方法を活用しているか。（複数回答可）

	1 実験	2 アンケート	3 文献調査	4 ディスカッション	5 グループワーク	6 インタビュー	7 外部連携	8 セミナーや研修
28年度 n=308	68	81	165	39	64	74	62	62
29年度 n=346	137	134	253	66	83	141	127	78
30年度 n=357	142	164	264	94	80	159	120	75

＜分析＞

・ディスカッションが大きな伸びを示している。授業でも多くの議論を求められている。このことから、ディスカッションによって課題に対する理解の深まりが促進されるということを実感し、ディスカッションという方法を用いているのではないかと推測される。また、これは【5】の友達と課題について議論したという回答が増えていることにもつながると考えられる。

・アンケートも伸びを見せている。これにはいくつかの理由が考えられる。一点は、多くの回答を得ることが研究のデータとしての正当性・妥当性が得られるということへの理解がすすんだということが考えられる。もう一点は、手軽な調査方法として実施しやすいという点である。指導は行っているが、アンケートが妥当な研究方法であるという点に関して、より丁寧なアンケート作成に際しての指導をしていく必要性も考えられる。

### 【9】SGHの活動や研究を通して身についたスキル（※IBのATLスキルとの関わり）

各スキルを5段階で評価

	5非常に身についた	4やや身についた	3変化なし	2やや下がった	1非常に下がった	0わからない	
28年度 n=308	5	4	3	2	1	0	未回答
①コミュニケーション	66	113	89	6	4	16	14
②協働	68	122	83	5	3	16	11
③整理整頓	54	103	107	12	6	15	11
④情動	45	89	125	8	9	20	12
⑤振り返り	57	121	90	10	4	15	11
⑥情報リテラシー	81	109	85	4	4	13	12
⑦メディアリテラシー	70	114	89	3	5	16	11
⑧批判的思考	78	110	87	4	2	16	11
⑨創造的思考	61	121	91	6	4	14	11
⑩転移	61	98	112	5	6	15	11

	5	4	3	2	1	0	未回答
29年度 n=346	5	4	3	2	1	0	未回答
①コミュニケーション	85	170	68	2	1	12	4
②協働	96	143	83	6	1	11	2
③整理整頓	75	128	117	7	1	12	2
④情動	55	120	135	11	4	15	2
⑤振り返り	78	163	78	4	4	13	2
⑥情報リテラシー	97	158	69	5	0	11	2
⑦メディアリテラシー	85	148	93	3	1	10	2
⑧批判的思考	95	149	76	10	0	10	2
⑨創造的思考	85	133	107	5	0	10	2
⑩転移	66	154	103	4	1	12	2

	5	4	3	2	1	0
30年度 n=356	5	4	3	2	1	0
①コミュニケーション	94	177	67	5	0	13
②協働	86	172	84	4	2	8
③整理整頓	77	156	103	11	2	7
④情動	59	122	146	17	5	7
⑤振り返り	84	189	73	4	2	4
⑥情報リテラシー	118	158	71	2	1	6
⑦メディアリテラシー	100	173	72	5	1	5
⑧批判的思考	120	156	64	6	3	7
⑨創造的思考	82	163	93	10	1	7
⑩転移	67	173	97	10	0	9

#### <分析>

・⑥、⑦、⑧が全体としては「5非常に身についた」という回答がやや高くなっている。これは、これまでの活動で、情報に対して、正確な情報を得ること、ウェブなどの情報を安易に信じて使用しないこと、メディアの情報を常に批判的に捉えることの必要性の指導をしてきたことから、生徒もこれらのスキルが身に付き、その重要性を感じていると推測される。

## 4.2 ISS チャレンジによる生徒の変容

ISS チャレンジでは、生徒課題研究の「研究実施計画書」（提出 5 月）「研究経過報告書」（同 10 月）「研究論文」（同 1 月）「フィールドノート」（同 1 月）に対して、教員がルーブリックを用いて観点別評価を行う。これは、ISS チャレンジが課題研究の校内コンペティションでありその選抜に用いるためでもあるが、それ以上に、研究のプロセスを適切に評価することで生徒の成長を意図したものである。同様の趣旨から、生徒自身にも 5 月と 1 月に自己評価を行わせ、7 月と 9 月には外部評価会を設けている。これらの評価はすべて数値で表現されるとともに文章でも表現され、生徒にフィードバックされる。今年度 ISS チャレンジで SGH 課題研究を一年間継続した 59 チームに対する評価結果を分析し、以下のような考察を得た。この考察結果は昨年度のものと同様であり、高校生の課題研究において普遍的に見られる傾向だと考えられる。

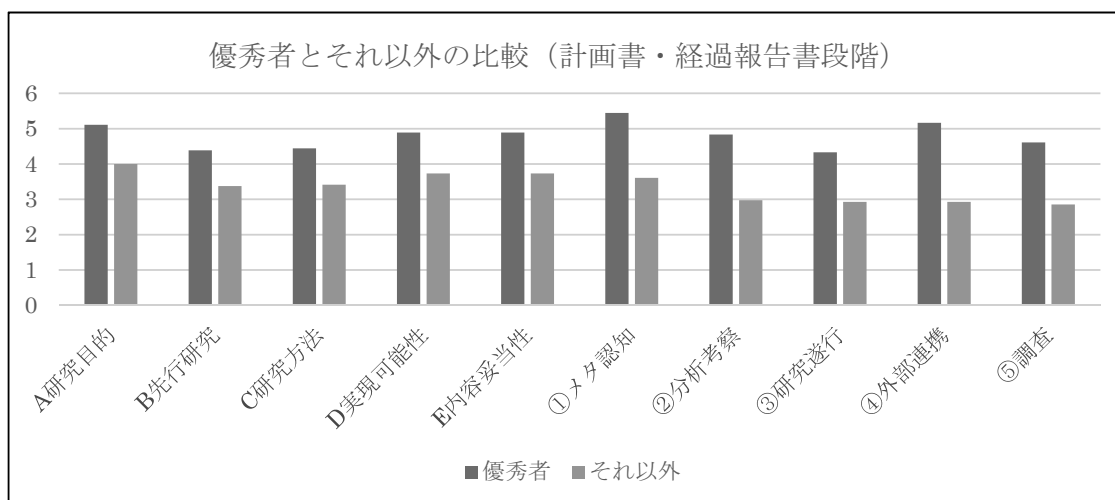
- ・最優秀／優秀チームは計画書段階での「研究目的」「実現可能性」「内容妥当性」評価が高い。
- ・最優秀／優秀チームは経過報告書段階での「メタ認知」評価が高い。
- ・最優秀／優秀チームは最終論文での「調査方法・内容」評価が高い。
- ・評価上昇チームは経過報告書段階での「メタ認知力」「外部連携」評価が高い。
- ・評価下降チームは経過報告書、フィールドノートでの「外部連携」評価が極度に低い。
- ・評価下降チームは計画書段階で既に「実現可能性」「内容妥当性」評価が低く、早い段階で手を打つ必要がある。

### 〈分析 1〉セミファイナリスト以上とそれ以外の比較

今年度の ISS チャレンジでは、最終的にファイナリスト（最優秀賞）4 チームとファイナリスト（優秀賞）14 チームを選抜した。教員によるルーブリック評価について、この 18 チームとそれ以外のチームとを「研究計画書」段階と「研究経過報告書」段階で比較したのが下図【1】である。最終的に成果を出した研究は、計画書段階から全ての観点において優位にあるが、特に計画書での「A 研究目的の明確さ」「D 実現可能性」「E 内容妥当性」は高い値を示している。また、経過報告書では「①メタ認知」がきわだって高く「それ以外」との差も大きい。次いで「④外部連携」「②分析考察」が高くなっている。研究序盤や中盤のプロセスにおいてこれらの要素が重要であることが分かる。

【1】セミファイナリスト以上とそれ以外の比較（研究計画書・研究経過報告書段階）

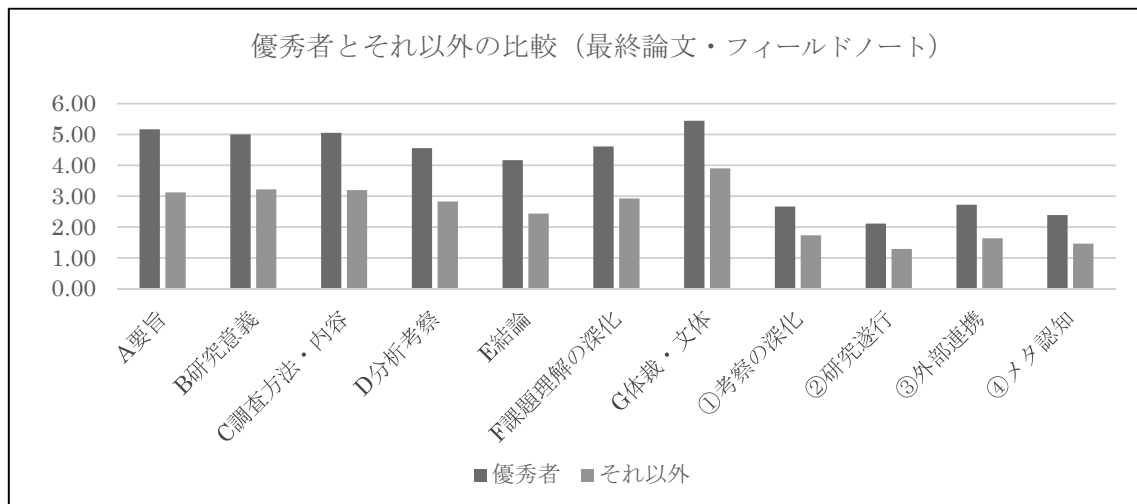
観点	研究計画書（5月）						研究経過報告書（10月）					
	A研究目的	B先行研究	C研究方法	D実現可能性	E内容妥当性	合計	①メタ認知	②分析考察	③研究遂行	④外部連携	⑤調査	合計
最高水準	6	6	6	6	6	30	6	6	6	6	6	30
優秀者	5.11	4.39	4.44	4.89	4.89	22.94	5.44	4.83	4.33	5.17	4.61	24.39
それ以外	4.00	3.38	3.41	3.73	3.73	17.79	3.61	2.98	2.93	2.93	2.85	15.15
差	1.11	1.01	1.03	1.16	1.16	5.15	1.83	1.86	1.41	2.24	1.76	9.24



【2】は「最終論文」と「フィールドノート」段階の評価の比較である。「最終論文」はやはりセミファイナリスト以上のチームは全般的に高い値を示すが、特に「A 要旨」「C 調査方法・内容」が高評価であり、「それ以外」との差も大きいことが目を引く。高校生の課題研究は、調査が科学的方法に則って行われており妥当な考察が行われていることが成否を分ける鍵であることが分かる。また、昨年度の報告書で「継続研究に対しては1学期の早い段階で外部評価会のような機会を与える必要があるかもしれない。」と考察し、今年度は7月に外部評価会を設けたが、これは継続研究のみならず全体に影響を与えたものと思われる。外部評価会に参加したチームは、研究経過報告書の「①メタ認知」、フィールドノートの「③外部連携」の評価が高い傾向が見られる。

## 【2】セミファイナリスト以上とそれ以外の比較（最終論文・フィールドノート）

観点	最終論文（1月）								フィールドノート			
	A要旨	B研究意義	C調査方法・内容	D分析考察	E結論	F課題理解の深化	G体裁・文体	合計	①考察の深化	②研究遂行	③外部連携	④メタ認知
最高水準	6	6	6	6	6	6	6	42	3	3	3	3
優秀者	5.17	5.00	5.06	4.56	4.17	4.61	5.44	34.00	2.67	2.11	2.72	2.39
それ以外	3.12	3.22	3.20	2.83	2.44	2.93	3.90	21.63	1.73	1.29	1.63	1.46
差	2.05	1.78	1.86	1.73	1.73	1.68	1.54	12.37	0.94	0.82	1.09	0.93



### 〈分析2〉評価上昇群と下降群の比較

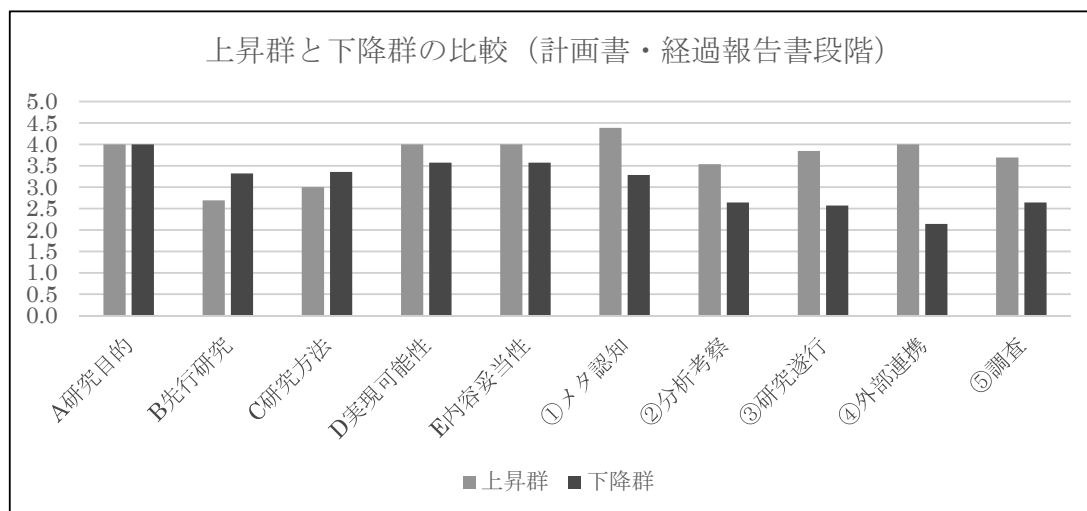
研究計画書と最終論文・フィールドノートの評価を比べ、研究のプロセスにおいて評価が上昇していったチーム13と逆に下降傾向であったチーム13を比較した（下図【3】【4】）。計画書段階では甲乙つけがたかった両群が、経過報告書段階で大きく差を広げていく様子が見てとれる。なかでも研究経過報告書の「④外部連携」で差が大きく、次いで「⑤調査」「③研究遂行」で差が大きい。生徒たちが一年間かけて課題研究の水準を上げていくためには、調査をきちんと行う研究遂行力が必要なのはもちろんだが、外部に専門家や問題の当事者につながる組織力・対話力が重要であることが分かる。

また、評価下降チームは計画書段階で既に「D 実現可能性」「E 内容妥当性」が低いのも目を引く。「A 研究目的の明確さ」は上昇群と変わらない高い数値を示しているところを見ると、達成したいゴールは見えているのに研究デザインの段階で躓いていないのではないかと考えられる。今年度、このような生徒への手当てとして「研究相談会」を5月に開いた。低学年の生徒を中心に利用があり、「研究の仕方が具体的にイメージできた」との声が寄せられたものの、5年6年といった高学年の生徒でも研究デザインで躓くことが多いことを考えると、早い段階での教員からのアドバイスが大きな鍵を握ると言える。



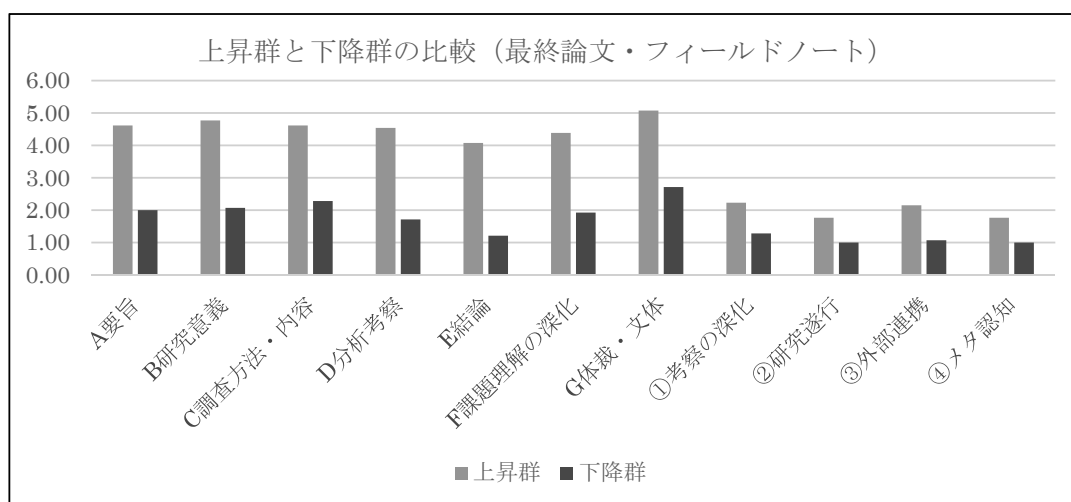
【3】評価上昇群と下降群の比較（研究計画書・研究経過報告書段階）

観点	研究計画書（5月）						研究経過報告書（10月）					
	A研究目的	B先行研究	C研究方法	D実現可能性	E内容妥当性	合計	①メタ認知	②分析考察	③研究遂行	④外部連携	⑤調査	合計
最高水準	6	6	6	6	6	30	6	6	6	6	6	30
上昇群	4.00	2.69	3.00	4.00	4.00	16.92	4.38	3.54	3.85	4.00	3.69	19.00
下降群	4.00	3.32	3.36	3.57	3.57	17.75	3.29	2.64	2.57	2.14	2.64	13.29
差	0.00	-0.63	-0.36	0.43	0.43	-0.83	1.10	0.90	1.27	1.86	1.05	5.71



【4】評価上昇群と下降群の比較（最終論文・フィールドノート）

観点	最終論文（1月）							フィールドノート				
	A要旨	B研究意義	C調査方法・内容	D分析考察	E結論	F課題理解の深化	G体裁・文体	合計	①考察の深化	②研究遂行	③外部連携	④メタ認知
最高水準	6	6	6	6	6		6	42	3	3	3	3
上昇群	4.62	4.77	4.62	4.54	4.08	4.38	5.08	32.08	2.23	1.77	2.15	1.77
下降群	2.00	2.07	2.29	1.71	1.21	1.93	2.71	13.93	1.29	1.00	1.07	1.00
差	2.62	2.7	2.33	2.83	2.87	2.45	2.37	18.15	0.94	0.77	1.08	0.77



### 4.3 進路とSGHの関わり

#### 6年生アンケート集計結果と分析

過去2年度のアンケート集計結果と比較し、SGHの活動実績を進路や入試で利用した生徒数が30名となり、学年在籍生徒数の2割を超えている。

昨年度、および今年度のISSチャレンジのファイナリスト・セミファイナリスト経験者の75パーセントは特別入試で難関大学の合格を得ている。

進路を考えるに際してSGHの活動が有効であると考えている生徒が33名、回答者の26パーセントである。大学入試出願や受験に際してSGHの活動による影響や効果があると答えた生徒が99名、回答者の78.5パーセント（前年比10.3パーセント増）となった。

#### (1) 目的

SGH研究開発事業を通して、生徒がどのような意識の変容を見せるか、また課題研究の取り組みやSGHに関連する活動がどの程度進路選択や進路決定に影響を及ぼすかを調査・分析する。

#### (2) 実施概要

調査時期 2018年2月下旬

対象 本校6年生（回収数126名/学年在籍数131名）

(3) 前年度に引き続き、最終学年である中等6年生（有効回答数126名）に対し、進路との関わりについてアンケートを行った。アンケート項目と回答数は次ページ以降に示した通りである。比較対象として、過去2年度分の回答状況も掲載する。

これまでと比べ、今年度のSGHの活動実績を利用したと回答した生徒数は増加している。①の「SGHの活動実績を使用した」という生徒は29名となり、「SSHとSGHの活動実績を両方使った」という生徒も含めると30名である。これは、前年度よりも16名増（12%増）となり、学年全体の2割強の生徒がSGHの活動実績を大学入試に活用したということになる。SSHでの活動実績利用も、前年度3名に対し今年度11名と増えているが、SGHの活動実績利用は明らかに増加の傾向を示しており、校内での割合は多いと言って良いであろう。

項目②の「どのような入試で活用したか」に対する回答では、1「推薦入試（公募制・指定校）に利用した」という生徒は17名であり、過去の回答状況に対し3、4倍となった。また、2「自己推薦入試・AO入試に利用した」という生徒は24名であり、前年度の11名に対し約2倍へと増加している。

次に項目③の回答状況について注目したい。入試において、実際にどの活動実績を活用したかという回答状況は、1「課題研究の成果」が34名と最も高く、次いで2「外部で発表したこと」、3「課題研究で受賞したこと」も同率で21名の回答となった。外部で発表した生徒全員が受賞できたわけではないが、他校の高校生や教員、あるいは大学教授などの専門家の前で発表をし、研究や発表に対して客観的な評価を得るといった経験は生徒の研究者としての素養を育み、また、それらの活動や実績は大学入試において影響があると言える。また、5「海外研修の経験」も軽視できない数値と言える。単に海外でフィールドワークをしたという経歴を得ることが目的ではなく、そこで得られた知見や発見、あるいは課題研究の発表やグローバルなテーマで議論を重ねたことが生徒の課題意識や研究への姿勢をより高め、進路の方向性や大学の研究との結びつきを強めたと推測できる。

ここで、昨年度と今年度において優秀な研究成果を残した生徒の進路状況について記載する。ISSチャレンジ（校内の課題研究コンペティション）の最終選考に残ったファイナリスト（上位4組）・セミファイナリスト（ファイナリストに次ぐ14組）の経験のある6年生は、10組24名である。このうち、2018年度現在で特別入試・海外入試を含めてすでに合格し進学先が決まっている生徒は16名である。

合格先・進学先（予定）としては、筑波大学・早稲田大学・慶應義塾大学・上智大学・立教大学・

津田塾大学などが挙げられる。16名全員がSGHの成果を活用して合格を決めたわけではないが、全体として課題研究における上位層はその成果を活用して難関大学と言われる大学への合格・進学をするという傾向が見受けられる。

この他にも項目④は概ね横ばい傾向となっている。1「外国語の資格」は76名が回答しており、大学入試における言語資格の重要性は依然として高いことを示している。項目⑥も、これまで緩やかに回答数が上昇しているが、3「進路に関する理解が深まったり、広がったりした」という項目は前年度よりも13名増の33名となり、前述した今年度の①～③項目の値とも整合性が取れる。

SSH・SGHの活動実績と進路の関係についてのアンケート 2018年度		
注)④以降は①でSSHやSGHの活動実績を「4使わなかった」と答えた人も含めて回答してもらった		
Question	Answers	人(のべ)
① 今年度の入試においてSSH・SGHの活動実績を活用しましたか？	1 SSHの実績を使った	11
	2 SGHの実績を使った	29
	3 両方の実績を使った	1
	4 使わなかった	84
② ①1-3 使った人はどのような入試で活用しましたか？(複数回答可)	1 推薦入試(公募制・指定校)	17
	2 自己推薦入試・AO入試	24
	3 帰国生入試	2
	4 国内のその他の入試	2
	5 海外大学の入試	6
	6 その他(IB入試1)	1
③ ①1-3 使った人はどのようなことを活用しましたか？(複数回答可)	1 課題研究の成果	34
	2 課題研究を外部で発表したこと	21
	3 課題研究で受賞したこと	21
	4 国内研修の経験	7
	5 海外研修の経験	18
	6 その他(イベントへの参加1、海外の学校での経験1、研究のプロセスから得たスキル1、不明3)	6
	7	
④ SSHやSGHの活動実績以外で、今年度の入試において活用した実績はどのようなものがありますか？(複数回答可)	1 外国語の資格	76
	2 外部での活動実績(SSH・SGHに関連しない活動)	42
	3 習い事の成果	18
	4 コンテストの表彰実績(SSH・SGHに関連しない活動)	22
	5 その他(部活動2、学校行事2、特別委員会1、留学1、語学以外の資格1、不明3)	12
	6 使ったものはない	42
⑤ SSHやSGHの活動などを通して、進路に対する考えに変化や影響はありましたか？程度にかかわらず、あったか・なかったかで回答願います。	1 あった	35
	2 なかった	74
⑥ ⑤の質問で、「1 あった」と回答した人にお尋ねします。どのような変化や影響がありましたか？(複数回答可)	1 進路を考え直した	9
	2 進路が定まった	11
	3 進路に関する理解が深まったり、広がったりした	33
	4 進路に関する迷いが強くなった	10
	5 国際関係や海外進学への興味や意志を持つようになった	15
	6 外国語(英語含む)能力の重要性を実感した	14
	7 その他(対象を研究するのではなく趣味として楽しむことにした1、不明2)	3
⑦ 大学入試を含む進路を考えるに際して、SSHやSGHの活動は有効だと思いますか？	1 有効だと思う	33
	2 有効な部分もある	81
	3 有効ではないと思う	11
⑧ 大学入試の出願・受験においてSSHやSGHの活動実績は影響や効果があるものだと思いますか？実際に使えるものかどうか、実感としてどうであったかを回答して下さい。合否は問いません。	1 影響や効果がある	99
	2 影響や効果はない	22
	3 その他(進路と一致していればある1、学部学科による1、受賞の有無による1、わからない2)	5

(図1 進路とSGHの関わり - 6年生アンケート集計結果 2018年度7回生)

SSH・SGHの活動実績と進路の関係についてのアンケート 2016年度、および2017年度				
注)④以降は①でSSHやSGHの活動実績を「4使わなかった」と答えた人も含めて回答してもらった			回収87名	回収126名
Question		Answers	2016年度	2017年度
①	今年度の入試においてSSH・SGHの活動実績を活用しましたか？	1 SSHの実績を使った	3	3
		2 SGHの実績を使った	15	14
		3 両方の実績を使った	1	0
		4 使わなかった	68	109
②	①1-3 使った人はどのような入試で活用しましたか？（複数回答可）	1 推薦入試（公募制・指定校）	6	4
		2 自己推薦入試・AO入試	11	11
		3 帰国生入試	3	1
		4 国内のその他の入試	1	2
		5 海外大学の入試	3	3
		6 その他	0	2
③	①1-3 使った人はどのようなことを活用しましたか？（複数回答可）	1 課題研究の成果	13	13
		2 課題研究を外場で発表したこと	4	5
		3 課題研究で受賞したこと	6	11
		4 国内研修の経験	4	2
		5 海外研修の経験	5	4
		6 その他	2	1
④	SSHやSGHの活動実績以外で、今年度の入試において活用した実績はどのようなものがありますか？（複数回答可）	1 外国語の資格	42	74
		2 外場での活動実績（SSH・SGHに関連しない活動）	21	45
		3 習い事の成果	10	19
		4 コンテストの表彰実績（SSH・SGHに関連しない活動）	14	25
		5 その他	6	13
		6 使ったものはない	39	41
⑤	SSHやSGHの活動などを通して、進路に対する考えに変化や影響はありましたか？程度にかかわらず、あったか・なかったかで回答願います。	1 あった	23	35
		2 なかった	63	90
⑥	⑤の質問で、「1 あった」と回答した人にお尋ねします。どのような変化や影響がありましたか？（複数回答可）	1 進路を考え直した	3	7
		2 進路が定まった	9	10
		3 進路に関する理解が深まったり、広がったりした	16	20
		4 進路に関する迷いが強くなった	0	4
		5 国際関係や海外進学への興味や意志を持つようになった	6	6
		6 外国語（英語含む）能力の重要性を実感した	3	8
		7 その他	0	3
⑦	大学入試を含む進路を考えるに際して、SSHやSGHの活動は有効だと思いますか？	1 有効だと思う	21	27
		2 有効な部分もある	51	83
		3 有効ではないと思う	15	16
⑧	大学入試の出願・受験においてSSHやSGHの活動実績は影響や効果があるものだと思いますか？実際に使えるものかどうか、実感としてどうであったかを回答して下さい。合否は問いません。	1 影響や効果がある	53	86
		2 影響や効果はない	25	27
		3 その他	6	12

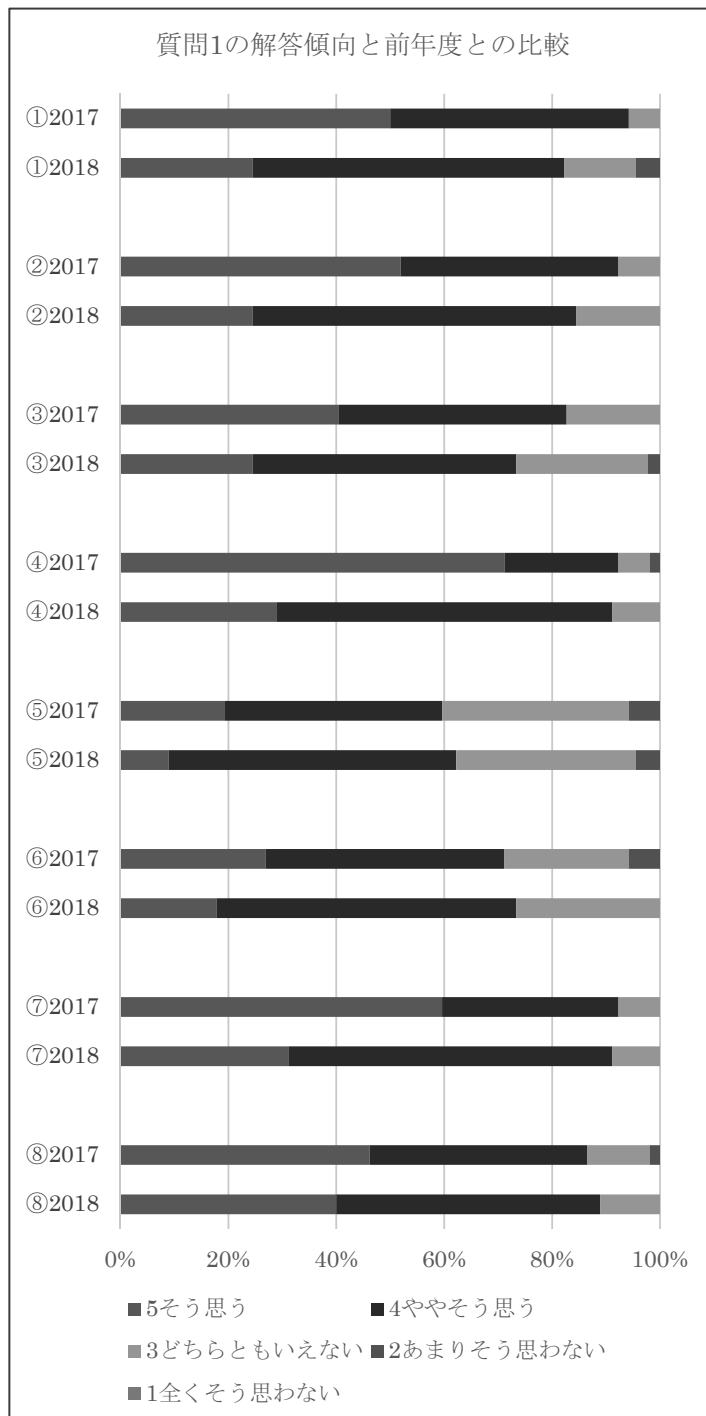
(図 2 進路とSGHの関わり－6年生アンケート集計結果 2016年度、2017年度)

#### 4.4 教員の意識と評価

- ・ 回答数 n=45 (前年度回答数 n=52)
- ・ 全体的な回答の傾向は変化なく、前年度同様、生徒にとってのSGH事業に意義や価値を見出し  
てはいるものの、授業改善やカリキュラム改善に対する意義や価値を見いだせていないよう  
に思われる。
- ・ 肯定的評価は前年度とほぼ同じであるが、「ややそう思う」という消極的な肯定がふえている。

今年度も教員向けにもアンケートを実施した。質問項目とともに集計結果を以下に掲げる。

##### 質問1 SGH事業を行うことの効果について



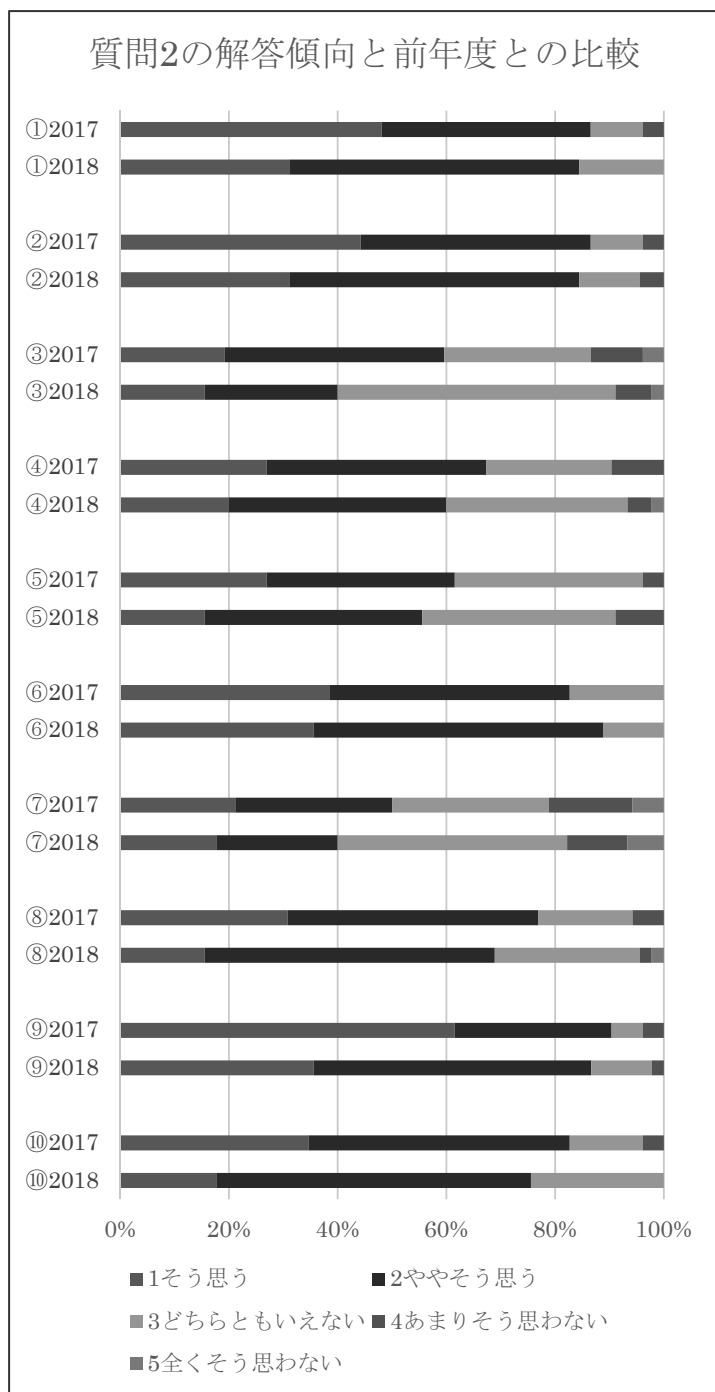
##### 質問項目

- ① 生徒の課題研究への意識や意欲の向上
- ② 生徒の社会問題への意識や関心の向上
- ③ 生徒の進路選択への良い影響
- ④ 外部講師による講演や支援の生徒への有効性
- ⑤ 授業改善やカリキュラム改革のための有効性
- ⑥ 教員の指導力向上・指導範囲の広がりへの有効性
- ⑦ 学校・教員・生徒と校外の機関・組織との連携への有効性
- ⑧ 学校の取組を校外に理解してもらうことへの有効性

##### <分析>

前年度と比べて「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合は大きく変わらない。しかし明確に「そう思う」と回答する割合は特に①・②・④・⑦の質問項目で減少しており、教員側から見て生徒の変容を明確に判断できるような状況が見えにくかったものと考えられる。

質問2 SGH 事業を通じた教員自身の変化・変容



- 質問項目
- ① 課題研究への意識や関心への良い変化
  - ② 社会問題への意識や関心の高まり
  - ③ 授業内容や授業設計の改善
  - ④ 授業や課題研究における指導方法の良い変化
  - ⑤ 探究的な授業の導入
  - ⑥ 生徒への味方の変化（生徒の新たな面や能力・弱点の発見）
  - ⑦ 校外の機関・組織との連携
  - ⑧ 「グローバル社会で生きる資質・能力」への思考の深まり
  - ⑨ 自身の研修の必要性（国内外問わず）
  - ⑩ 本校への関心の高まり

<分析> 全体的な傾向は前年度から変わらない。⑨の質問項目については「そう思う」と答えた割合が減少している。自分が研修する必要があるという意識が希薄化しているとすれば、生徒に対する指導の充実も図れないこととなる。教員自身が学ぶべきという意識の向上を仕掛けなければならない。

質問3 課題研究によるATLスキルの習得（生徒）について

質問3は課題研究を通して生徒がどのようなスキルを身につけたと思われるかについての調査である。

	5非常に身についた	4やや身についた	3変化なし	2やや下がった	1非常に下がった	0わからない
<b>30年度 教員n=51</b>	<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	<b>2</b>	<b>1</b>	<b>0</b>
①コミュニケーション	9	35	5	1	0	2
②協働	3	32	13	1	0	3
③整理整頓	3	23	19	2	1	4
④情動	2	13	27	2	0	8
⑤振り返り	9	24	13	0	1	5
⑥情報リテラシー	13	33	3	1	0	2
⑦メディアリテラシー	7	34	8	1	0	2
⑧批判的思考	10	29	9	0	0	4
⑨創造的思考	9	29	12	0	0	2
⑩転移	2	28	17	1	0	4
<b>29年度 教員n=51</b>	<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	<b>2</b>	<b>1</b>	<b>0</b>
①コミュニケーション	15	29	6	0	0	1
②協働	16	29	4	0	0	2
③整理整頓	9	29	11	0	0	2
④情動	4	23	21	0	0	3
⑤振り返り	12	30	8	0	0	1
⑥情報リテラシー	14	31	5	0	0	1
⑦メディアリテラシー	13	32	4	0	0	2
⑧批判的思考	10	36	3	0	0	1
⑨創造的思考	9	36	5	0	0	1
⑩転移	6	34	10	0	0	1
<b>28年度 教員n=46</b>	<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	<b>2</b>	<b>1</b>	<b>0</b>
①コミュニケーション	10	34	1	0	0	0
②協働	6	35	4	0	0	0
③整理整頓	4	31	9	0	0	1
④情動	1	18	23	0	0	3
⑤振り返り	8	33	3	0	0	1
⑥情報リテラシー	12	31	2	0	0	0
⑦メディアリテラシー	11	32	2	0	0	0
⑧批判的思考	11	29	4	0	0	0
⑨創造的思考	10	34	1	0	0	0
⑩転移	3	35	6	0	0	2

<分析>

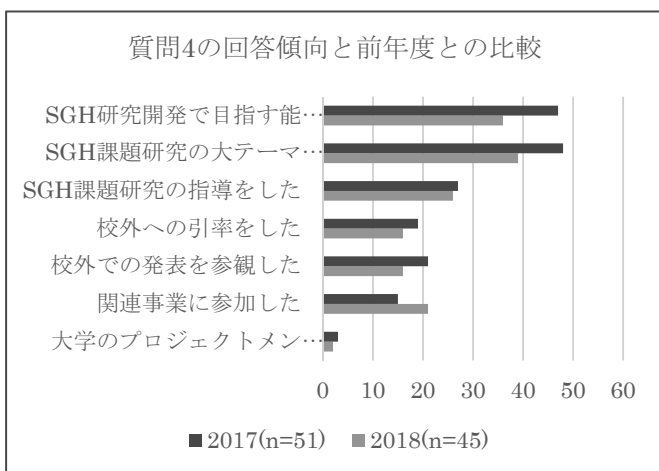
本校の教員集団の質的变化も要因としては考えられるが、全体として昨年度に比べ以下のような傾向がある。

- ・どのATLについても昨年度よりも「5非常に身についた」の割合が減少し、「4やや身についた」の回答や「3変化なし」の回答が増加している。
- ・昨年度・一昨年度にはなかった「2やや下がった」「1非常に下がった」の回答が見える。
- ・昨年度・一昨年度に比べ「0分からない」の回答が増加している。

<要因分析>

- ・SGHとしての経験が積み上がり、教員集団の規準が一定の高さ（厳しさ）を持つようになっており、生徒への評価が辛めになってきている。
- ・課題研究の取り組みそのものに懐疑的な教員が一定数いる。
- ・教員の異動等により、教員集団の質的变化があり、ATLスキルへの理解が全体に浸透していると言えなく、課題研究とATLを関連付けて考えられる教員が減少している。

質問4 これまでのSGH事業との関わりについて



<分析>

質問4・5ともに大きな傾向の変化はない。本校は国際バカロレアのMYPやDPの研修のために各都県の教員を1年～2年の範囲で受け入れているが、その教員を含めても前年度との回答傾向に変化はなかった。校外での発表を参観したり、生徒の引率をしたりした教員は多少増えている。昨年度までとわずかに違いがあるのは、SGHの大テーマや課題研究に関連する内容を授業で扱ったという教員が増えていること、外国語運用能力の伸長が見て取れると考えている教員が増えていることである。

質問5 外国語科教員・IM（イマージョン）担当教員の意識

